

立法裁量論と生存権訴訟

渡 部 高 明

The theory of Legislative Description and Litigation for the Right to Life

Takaaki WATABE

Abstract

The main purpose of the modern state is to realize the Welfare State.

From the view point of the legal level, the Principle of Trial is of great importance in Litigation for the Right to life.

It is the Theory of Legislative Description that has been established in Japan recently as the Principle of Trial in Litigation for the Right to life.

So first I made reconsideration of the items which were argued from the 'Meiji Constitution' standpoint.

And then I made a study of what the Unconstitutional Examination should be under the present constitution, especially through analyzing the Principle of litigation for the Right to Life.

I also tried finding the new viewpoint of the Theory of Legislative Description in Japan from the trend of Social Welfare Litigation in America.

立法裁量論と生存権訴訟

- 1 序
- 2 明治憲法下の「立法裁量」論
- 3 現憲法下の立法裁量論と生存権訴訟
- 4 アメリカにおける社会福祉訴訟
- 5 結

1 序

現代国家の目標は、福祉国家の実現にあると言われる。そして、福祉国家の実現は、法的には社会福祉訴訟、とりわけ生存権訴訟となってあらわれる。従って、生存権訴訟の在り方は、福祉国家実現という現代国家の目標に迫まる大きな問題である。

しかし、現実の生存権訴訟における判例は、「個々の施策について、その給付要件、対象を如何にするか、支給額をどの程度にするかは、い

ずれも立法政策の問題であって、立法府の裁量に任せられているものといわなければならない」として、およそ生存権なるものの実体的内容が立法府の裁量に広く委ねられていると解している。いわゆる立法裁量論による司法審査の空洞化である。しかし、裁判所によるこうした立法裁量論の展開は、福祉国家実現にむけての積極的姿勢は見られず、法律のもつ保守性だけが残る結果となっている。

そこで、本稿は法的レベルにおいて福祉国家実現の中核的議論となる「立法裁量論」の意味を、まず明治憲法下の議論から見い出してみる。続いて、現憲法における生存権訴訟を分析することで立法裁量論の判例の用い方を批判的に検討してみる。さらに、アメリカの生存権訴訟に関する論文から若干の視点を得ようと思う。